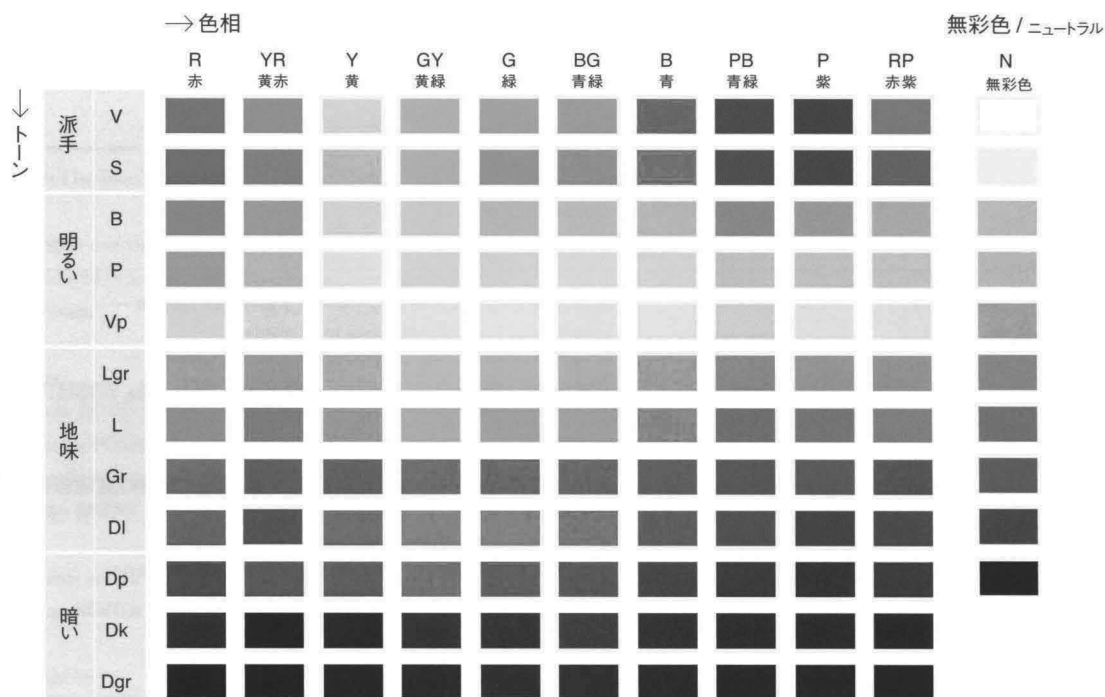


[本文 P.72-82 参考図版]

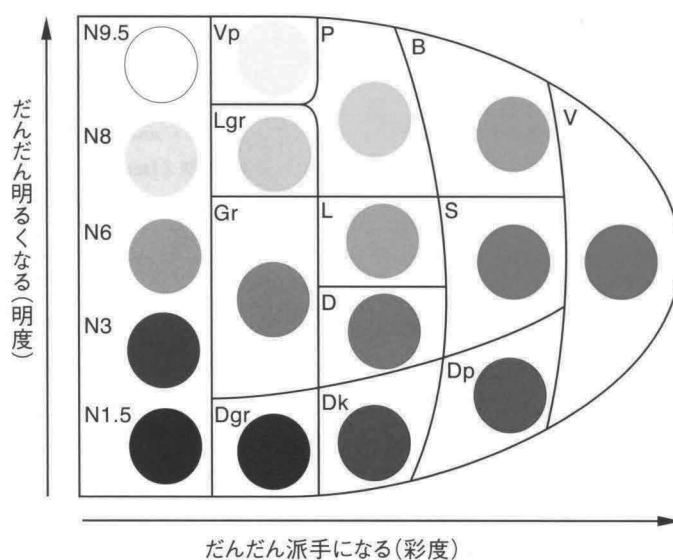


[図表1] HUE & TONEシステム一覧表 (本文P.73参照)

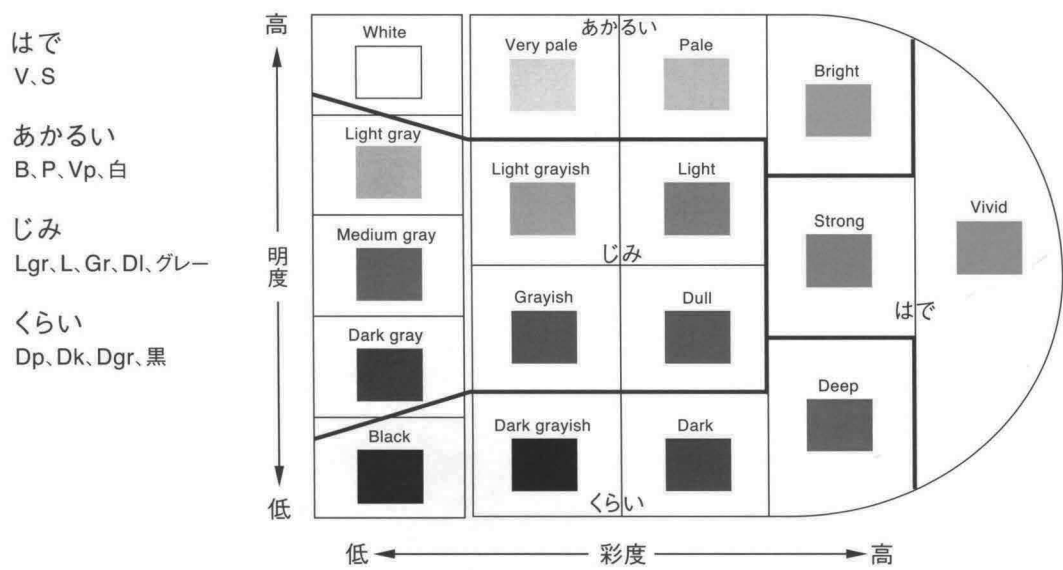
[有彩色の12基本トーン]

V..... ヴィヴィッド
S..... ストロング
B..... ブライト
P..... ペール
Vp..... ベリーペール
Lgr..... ライトグレイッシュ
L..... ライト
Gr..... グレイッシュ
DI..... ダル
Dp..... ディープ
Dk..... ダーク
Dgr..... ダークグレイッシュ

(N=ニュートラル無彩色)



[図表2] トーン(色調) (本文P.74参照)



〔図表3〕 4トーン分類 (本文P.74参照)

		R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP	計	Neutral	
はで	V	19.4	8.4	7.5	1.5	5.2	0.7	0.6	0.4	2.4	0.3	54.3	あかるい N9.5	13.8
	S	0.1	0.1		0.1				0.1			0.6	N9	0.4
あかるい	B	0.1	0.3	0.1	0.3			0.4			2.0	3.2	N8	0.3
	P	0.3	0.3	1.0	0.3			1.5	0.1			3.5	じみ N7	
じみ	Vp	0.1	0.1	0.7		0.1		0.1			0.1	1.4	N6	0.5
	Lgr	0.1	0.4	0.3				0.3			0.1	1.3	N5	0.1
くらい	L		0.4	0.6		0.1		0.3	0.1			1.5	N4	
	Gr	0.1	0.3			0.1		0.1		0.3		1.0	N3	0.1
くらい	DI		0.1	0.6		0.1			0.1	0.1		1.1	N2	
	Dp	0.1	0.3	0.1					0.3			0.8	N1.5	0.0
くらい	Dk		0.1			0.3			1.1			1.5	計	29.3
	Dgr	0.1	0.1						0.1			0.4		
計		20.7	11.0	10.9	2.2	6.0	0.7	3.4	10.5	2.8	2.5	70.7		

総数は760から、透明、無色、不明等57を抜いた数。一部、虹等の表現に対してVトーンの7色への入力あり。以下同様

〔図表4-1〕 生の色 色相&トーン分析表 (本文P.74参照)

		R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP	計	Neutral		
は で	V	3.3	0.1	0.9		0.6		0.6	4.7	1.7		11.9	あ か る い	N9.5	28.3
	S								0.1		0.1	0.3		N9	0.3
あ か る い	B			0.1				0.3			0.1	0.6	じ	N8	
	P			0.1				0.4		0.1		0.7		N7	
じ み	Vp		0.1					0.1	0.1		0.1	0.6		N6	9.3
	Lgr							0.3				0.3	み	N5	0.1
く ら い	L		0.3	0.4					0.1			0.9		N4	0.1
	Gr								0.3			0.3	く	N3	
Dp			0.1									0.1	ら	N2	0.3
	Dk	0.1						0.1	1.0	0.1		1.4	い	N1.5	42.0
Dgr		0.3	0.1			0.1			0.1	0.4		1.1		計	80.5
計		3.7	1.4	1.6		0.7		1.9	7.0	2.7	0.4	19.5			

〔図表5-1〕 死の色 色相&トーン分析表 (本文P.75参照)

		R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP	計	Neutral		
は で	V	1.6	0.6	3.4	0.2	2.4		0.3	2.9	2.3		13.7	あ か る い	N9.5	42.3
	S													N9	0.5
あ か る い	B							0.3				0.3	じ	N8	0.2
	P	0.2	0.2	1.6	0.2	0.2	0.2	1.6	0.3	0.3	1.8	6.5		N7	
じ み	Vp		0.2	0.8				0.5				1.5		N6	10.3
	Lgr							0.6				0.6	み	N5	0.2
く ら い	L		0.3	1.5					0.2			1.9		N4	
	Gr		0.2						0.2			0.3	く	N3	0.2
Dp				0.2								0.2	ら	N2	0.2
	Dk	0.2		0.2		0.2		0.2	0.2	0.2		1.6	い	N1.5	17.9
Dgr		0.2						0.2	0.5	0.2		1.1		計	71.7
		0.2							0.3			0.5			
計		2.1	2.6	7.6	0.3	2.7	0.2	3.7	4.5	2.7	1.8	28.3			

〔図表6-1〕 死後の色 色相&トーン分析表 (本文P.76参照)

ステージ	1	2	3	4	5	6	7
色数	2色	3色	4色	5色	6色	7色	8色以上
色彩語彙	白	白	白	白	白	白	白
			(イエロー)	イエロー	イエロー	イエロー	イエロー
		レッド					オレンジ
			レッド	レッド	レッド	レッド	ピンク
	ブラック	ブラック					レッド
			(グリーン)	グリーン	グリーン	グリーン	グリーン
					ブルー	ブルー	ブルー
							パープル
						ブラウン	ブラウン
			ブラック	ブラック	ブラック		グレー
						ブラック	ブラック

〔図表7〕 色彩語彙発展の7段階 (Berlin & Kayに基づく) (本文P.80参照)

「生・死・死後」の色に関するイメージ

東北芸術工科大学学生への質問紙調査結果から

Color Images of Life, Death and After Death
Using a Questionnaire Method with Students of Art

久保田 力 | Chikara KUBOTA

We have been researching spirituality among the students at an art and design university by way of a questionnaire method that we have performed twice, in 2010 and 2011, at Tohoku University of Art & Design (TUAD). This article is focused on a survey of their color images of this life, death and after death, which consisted of three questions (Q2-Q4). “If you were to put a color to this life of yours (Q2), your death (Q3), and the next world after death (Q4), what color would you choose?” The results are as follows. In response to Q2, about 20% of them answered “red”, and about 15% “white”, followed by “blue”, “yellow”, “gray”, and “orange”. In response to Q3 and Q4 the colors are primarily divided into “black” and “white”. We made four kinds of charts for each question by way of NCD color system. It is interesting to see that the colors of life, death and after death show the same result as that of human basic color terms, the development of which were indicated by B. Berlin and P. Kay from the viewpoint of cognitive anthropology. In brief, “black” and “white” are in the first stage of color terms in every culture, and then “red” appears as the third color in the second stage.

Purple color showed a quite negative-sided character of life, death, and after death in our research, contrary to our expectations. We need to examine the complex sensibility or the multilayered sensibility of artists, such as a sense of body and that of spirituality, or that of intelligence and sensitivity, as well as the sense of color.

Keywords:

生=life、死=death、死後=after death、色イメージ=color images、
スピリチュアリティ=spirituality、感性=sensibility

1. はじめに

本稿は「芸術とスピリチュアリティ」に関する美大生（東北芸術工科大学）に対する質問紙調査の結果と分析の報告である。1回目の予備調査は2010年1月に実施され、その結果・分析を『論集（印度学宗教学会）』37号（2010）において報告した¹。その後、予備調査の約3倍の学生回答者（760名）を対象とした第2回目の調査を2011年1月に敢行し、その全体的な集計と分析を『東北芸術工科大学紀要』（第18・19合併号）に報告しておいた²。そこで指摘したことのうち以下の3点を確認しておく。芸術学部とデザイン工学部の2学部で構成された本学学生男女のうち、

- 1）芸術学部（全体）と女子（全体）とは同様の高いスピリチュアリティを示すこと。
- 2）学部にかかわらず、男子より女子のほうがスピリチュアル度の平均値が高いこと。
- 3）女子に限ると、芸術学部の女子のスピリチュアリティの平均値の高さが際立っていること。

したがって、「芸術とスピリチュアリティ」との相対的關係性が最も顕著に認められるのは芸術学部の女子のグループであろうということが推察される。全学的には、デザイン工学部よりも芸術学部のほうが、男子よりも女子のほうが、また、特に芸術学部の女子の数値が高い。注意すべきは、スピリチュアルな関心が高いことが良いことだと指摘しているのではなく、客観的な観点から、芸術的創作とスピリチュアリティとの関連性は集団を異にするとその度合も異なるということが実証的に認められるのである。

本稿では、第2回目の調査における、われわれの主要な関心事の1つであった「生の色」「死の色」「死後の色」のイメージ調査の結果について新たな図表を用いた分析を

要約的に報告する。詳細は『論集(印度学宗教学会)』38号(2011)を参照されたい³。

色に関する感性的なイメージは、芸術・デザインを志向する学生にとっては、ある意味で生命線とも言える重要な問題意識であろう。一方、生や死、死後の色などという、いわゆるスピリチュアルな色彩感覚についての本格的な集計・分析の報告は筆者寡聞にしていまだ公表されていないように思われる。したがって、本稿にも一定の存在意義はあるかと思う。質問紙調査に協力していただいた延べ約1000人の本学学生のみなさんに改めて深くお礼を述べるとともに、他の学生のみなさんもまた、本稿によってフィードバックされた結果を自らの感性と比較しながらこれからの創作・研究のための1つの参考資料として役立てていただければと願っている。

2. 色のトーン(色調)の観点からの分析と考察

質問紙では計46項目の質問をした。そのうち、問2、3、4の3つが本稿のテーマである。すなわち、

・問2「あなたの現在の“生”を一色の色でイメージするとしたら何色ですか。また、その理由も簡単に教えてください。」

・問3「あなたの“死”の色を一色の色でイメージするとしたら何色ですか。また、その理由も簡単に教えてください。」

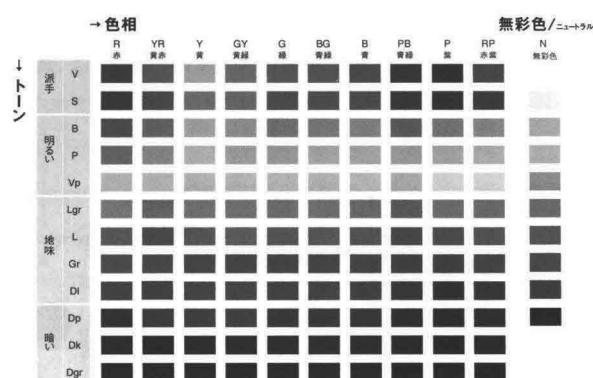
・問4「もし、“死後”を一色の色でイメージするとしたら何色ですか。また、その理由も簡単に教えてください。」

という3つの質問項目である。一般的にはなかなか答えづらい質問であり、「一色」という限定にもかなり無理があることを十分承知のうえで、芸術系の学生対象ならではの項目として挑戦的に問いかけた。

以下の分析や作図については、色の専門家である杉山朗子先生(日本カラーデザイン研究所主任研究員・東北芸術工科大学講師)に全面的にご協力していただいた。本来ならば本稿も共著とすべきところであるが、最終的な文責を筆者に一任されるご了解を得たので、ここに深く感謝の意を表明するとともに、その旨をお断りしておく。

さて、色を捉えるとき、光の波長などの数値でとらえるシステムのほかに、人が見て認識しやすい3種の属性を数値化した体系があり日本の工業規格でも取り入れられて

いる体系がある。それは、色相、明度、彩度の三属性から構成されたマンセル色彩体系(アメリカ)である。この体系によると、色彩は3次元の色立体で表わされる。一方、これを、わが国の日本カラーデザイン研究所(NCD)では、色相(Hue)を明度と彩度のバランスによる色調(トーン)という概念を用いて二次元化し、色の一覧表[図表1]を用いて分布分析を行っている。このカラーシステムはJIS(日本工業規格)と並んで世界的に通用するものである。



〔図表1〕 HUE & TONEシステム一覧表(カラー版はP.4参照)

〔図表1〕のHue&Tone(色相&トーン)システム一覧表に示された色の基本的分類を基に、〔図表2〕では、有彩色の12トーン(V=ヴィヴィッド～Dgr=ダークグレイッシュ)をベースにして無彩色(N)の5段階を加え明度と彩度を分類する。そして〔図表3〕は、それら17分類された色をさらに4つの色調(トーン)に分類する手法=4トーン分類法をとる。つまり、「あかるい」と「くらい」色群および「はで」と「じみ」な色群という4種である。〔図表2〕と〔図表3〕において、右側に張り出している先端(V=Vivid)が最も鮮やかなはでさを持った色である。左側の無彩色の列は、上が高明度の白、下が低明度の黒の位置である。

このトーンという観点から、今回の調査結果を集計してみると、生の色〔図表4-1～4〕、死の色〔図表5-1～4〕、死後の色〔図表6-1～4〕のように、3つの色に関する各々4種の図表によって集計される結果が得られた。〔図表4-1〕、〔図表5-1〕、〔図表6-1〕では、回答者数の割合に応じた色相・色調を実際の色の表示の大きさによって示している。また、〔図表4-2〕、〔図表5-2〕、〔図表6-2〕では、その結果を色相別に折れ線グラフで表した。〔図表4-3〕、〔図表5-3〕、〔図表6-3〕では、○の大きさが各色相の回答パーセンテージ

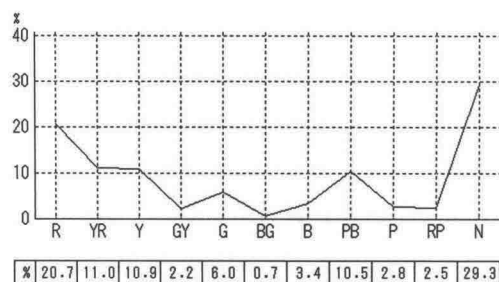
ジが示されている。さらに、[図表4-4]、[図表5-4]、[図表6-4]では、[図表3]の4トーン分類に基づいて「あかるい〜くらい」を縦軸に、「はで〜じみ」を横軸にしてそれぞれの回答に対するダイアグラムを作成した。(なお、トーン分類にあたっては、回答を、有彩色120種、無彩色10種の色相とトーンに判断し、適宜振り分け作業を行った。その際、「多色」「混色」などの表現回答はこの分類からは排除した。)

生、死、死後という3種の色について、トーンという観点でそれぞれ以下のような特徴が見出される。

まず、生の色イメージは、高彩度色への集中が特徴的である。[図表4-1]の最上欄に位置するV(Vivid)列は、R〜

	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP	計	Neutral
は	V	14.2	8.1	7.5	1.3	0.7	0.6	0.4	0.4	0.3	54.3	N9.5
で	S	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N9
あ	B	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N8
か	P	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N7
る	Vp	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N6
	Lgr	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N5
じ	L	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N4
み	Gr	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N3
	DI	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N2
く	Dp	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N1.5
ら	Dk	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N1
い	Dgr	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	8.1	N0.5
計		20.7	11.0	10.9	2.2	6.0	0.7	3.4	10.5	2.8	2.5	70.7

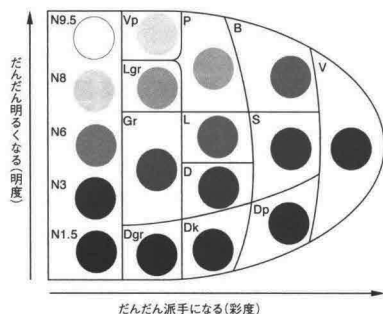
[図表4-1] 生の色 色相&トーン分析表(カラー版はP.5参照)



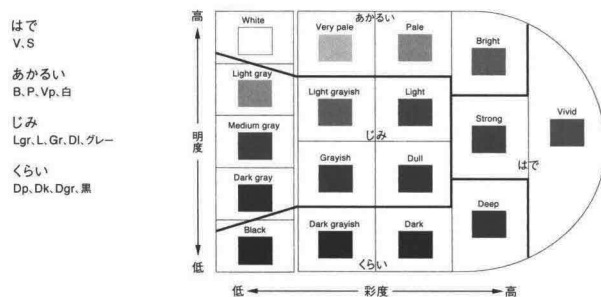
[図表4-2] 生の色 色相分布分析

[有彩色の12基本トーン]

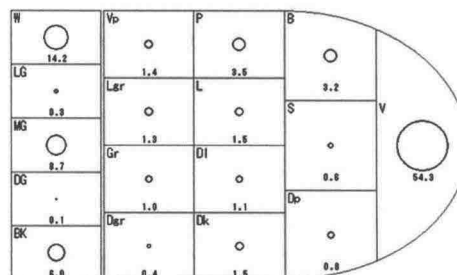
V——ヴィヴィッド
S——ストロング
B——ブライト
P——パール
Vp——ベリパール
Lgr——ライトグレイッシュ
L——ライト
Gr——グレイッシュ
DI——ダル
Dp——ディープ
Dk——ダーク
Dgr——ダークグレイッシュ
(N=ニュートラル無彩色)



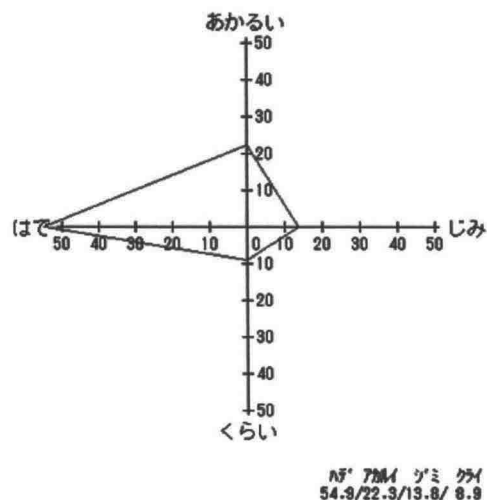
[図表2] トーン(色調)(カラー版はP.4参照)



[図表3] 4トーン分類(カラー版はP.5参照)



[図表4-3] 生の色 トーン分布分析



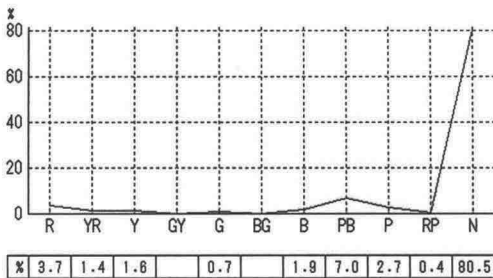
[図表4-4] 生の色 4トーン分析

RPまでを合計すると半数以上の54.3%となっている。これらには赤や黄や青が含まれる。つまり、分類できたうちの半数以上が、最も鮮やかな彩度を持った色の名称を挙げている。この色相はV(ヴィヴィッド)トーンであり、生き生きとして、活動的なトーンとされている。

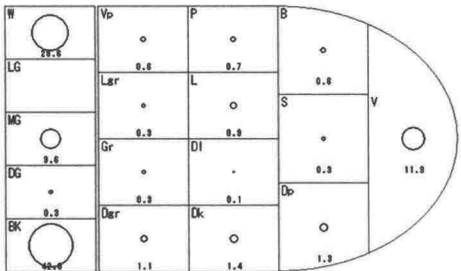
次に、死の色イメージ[図表5-1～4]は、黒と白2つの傾向に分かれたが、その中では、黒42.0% 白28.6%と黒のほうが1.5倍程度多い。注目されるのは、赤や青、紫といった先ほどの「はで」なVトーンを回答した者が11.9%存在するということである。「はで」で「あかるい」色も死の色と感じる学生が約15%いることは興味深い。

	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP	計	Neutral
は	V 32.5	0.1	0.9		0.6		0.6	1.7	1.7	11.9		N9.5
で	S						0.1	0.1	0.1	0.3		N9
あ	B		0.1				0.3	0.1	0.1	0.6		N8
か	P		0.1				0.4	0.1	0.1	0.7		N7
る	Vp		0.1				0.1	0.1	0.1	0.6		N6
い	Lgr						0.3			0.3		N5
じ	L		0.2	0.4			0.1			0.9		N4
み	Gr						0.2			0.3		N3
	Di		0.1							0.1		N2
く	Dp		0.6					0.4	0.3	1.3		N1.5
ら	Dk		0.1				0.1	0.1	0.1	1.4		
い	Dgr		0.2	0.1		0.1		0.1	0.4	1.1		
計		3.7	1.4	1.6		0.7		1.9	7.0	2.7	0.4	19.5

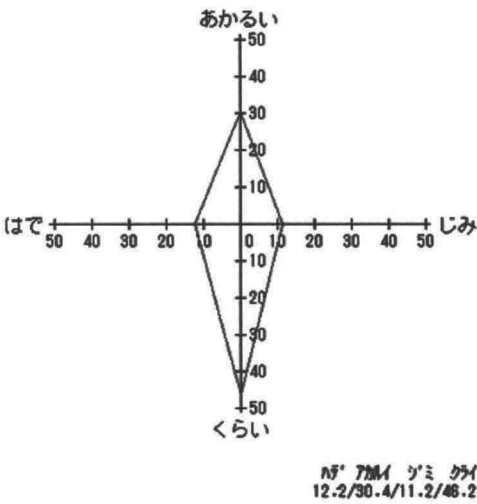
[図表5-1] 死の色 色相&トーン分析表 (カラー版はP.6参照)



[図表5-2] 死の色 色相分布分析



[図表5-3] 死の色 トーン分布分析



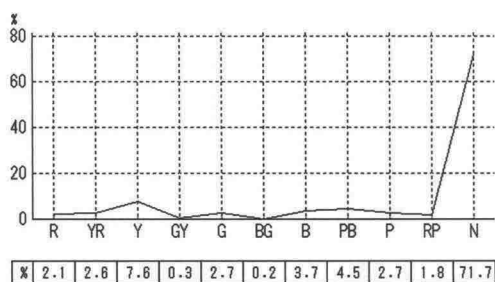
[図表5-4] 死の色 4トーン分析

	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP	計	
は	V	1.5	0.5	3.4	0.2	2.4	0.3	4.5	4.5		13.7	
で	S											
あ	B						0.3			0.3		
か	P	0.2	0.2	1.6	0.2	0.2	1.5	0.3	0.3	1.8	6.5	
る	Vp		0.2	0.8			0.5				1.5	
い	Lgr						0.6				0.6	
じ	L	0.3	1.5				0.2				1.9	
み	Gr		0.2				0.2				0.2	
	DI			0.2							0.2	
く	Dp	1.4			0.2		0.2	0.2			1.6	
ら	Dk	0.2		0.2			0.2	0.5	0.2		1.1	
い	Dgr	0.2						0.3			0.5	
計		2.1	2.6	7.6	0.3	2.7	0.2	3.7	4.5	2.7	1.8	20.3

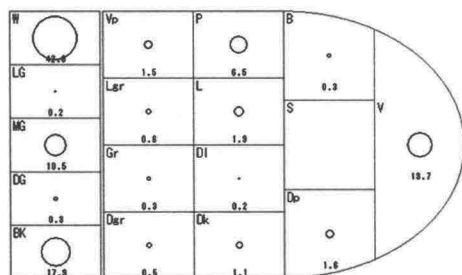
	Neutral
あ	N9.5
か	N9
ら	N8
い	N7
み	N6
	N5
	N4
<	N3
ら	N2
い	N1.5
計	71.7

	Neutral
あ	N9.5
か	N9
る	N8
い	N7
	N6
み	N5
	N4
く	N3
ら	N2
い	N1.5
計	71.7

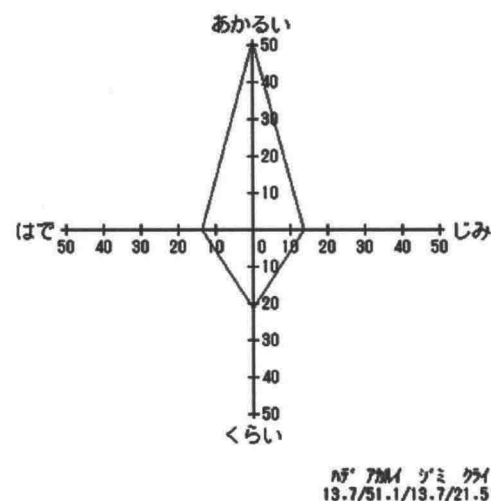
〔図表6-1〕 死後の色 色相&トーン分析表（カラー版はP.6参照）



〔図表6-2〕 死後の色 色相分布分析



〔図表6-3〕 死後の色 トーン分布分析



〔図表6-4〕 死後の色 4トーン分析

さらに、死後のイメージ色〔図表6-1～4〕も黒と白の両者に集中はしているが、逆に白42.3%、黒17.9%と2倍以上の差異を示している。そして、ここでも「はで」なVトーンが13.7%、「あかるい」トーンつまりB、P、Vpの合計が8.3%いて、両者合わせると22%になる。すなわち、死後の色は、死の色よりも7%程度「はで」で「あかるい」色相がイメージされているのである。死そのものよりも死後のイメージのほうが明るい色の感触で捉えられている。前回2010年の第1回調査では、Q8に「あの世の色」のイメージとして質問した。これに対する回答は「白」が最多で約55%、次が「黒」で約11%であった。（久保田・渡部、前掲註1論文、pp.(8)～(9)参照。）今回と比べると、単純集計においては「白」が20%減り、「黒」も4%減って「青」や「黄」「緑」等の明るい色の回答が相対的に増加している。（久保田他、註2の本学紀要論文、p.105参照。）

3. イメージされた色の理由について

ここで、学生たちがなぜ特定の色を回答したのかその理由の自由記述部分について触れておこう。以下に、記述された色の理由のなかから、典型的と判断されるもの、およびユニークだと思われるものを一括して紹介する。そして、各色の理由の最後に、独自性を持った特徴的な色（後述第4節参照）と感じられる「紫」を選んだ理由について、その大部分の理由記述を抜粋しておいた。（表現は多少変則的でも、学生の記述のままに転載した。）

A 生の色の理由

1)「赤」

・ 血の色、火の色、生命の色、パワー、エネルギー、マグマ、命を燃やすイメージ、動的なイメージ（複数回答一括表示）

- ・ 可能性に満ちあふれているから
- ・ 熱を持っているものが生きていると思うから

2)「オレンジ」

- ・ 赤になりきれていないから
- ・ 迷っていて、赤く燃え切っていない感じだから

3)「黄緑」

・ 現在はやりたい事をやれて楽しい一方、やりたい事が多すぎて大変だなあという、幸せな黄とつらい青がまざっています

4)「灰(グレー)」

・ 私は学生という身分で完全な大人でもなく、まだ自分の中で誇れるものも持たず未完成なので、グレーゾーンな気がして

・ まだまだ私は沢山のことを学びはじめたばかりで真っ白の状態に近い。でも悪いことを知って大人になっている。だから灰色。

・ グレーという色に私は特に負のイメージを持っていないのと、静かに、時にはげしくものごとを見つめていきたい、という希望も含んでグレーに。

5)「白」

・ いろんな人(色)に影響を受けて変わっていくから

・ 私にとって“生”とは光をイメージするもの。光をとらえる意識があることが生きていると感ずること。

6)「黒」

・ 黒い服が好きなので

・ 他を受けつけない、変えたくても変えられない。

7)「紫」

・ 最近恋をしているから(赤紫)

・ マニアック志向、思考?

・ 宇宙に広がっていく波紋のイメージ

・ 今がふんばりどころ

・ 静の青、情熱の赤がまじりあう

・ 恐怖的なものから神秘的なもののイメージの色

・ 情熱の赤で常に何かに対し興奮しているようで、本当はどこか冷めた自分がいるから

・ 迷いがあって混とんとしているように思ったので

・ いまだうろろしている

・ やりたいことが沢山あるが周囲や自分自身に妨害されてうまくいかないから

・ よどみなくはないイメージ

・ 明るい色のイメージではないと思ったから

・ 課題がうまくいったが、体調が悪いため(赤紫)

・ 悩みや不安が多いから

・ いろいろ悩んだり迷ったりしているから

・ どっちつかずなはっきりしない色

・ 暗いわけでもなく、明るいものでもないから

B 死の色の理由

1)「黒」

・ 葬式のイメージが強いため(多数)

・ 喪服のイメージ(複数)

・ 光のない世界のイメージ

・ 闇、無などを連想するから

2)「白」

・ まぶしい光のイメージ

・ めまいがしたり気を失うときは目の前が真っ白になるので

・ 死者は白い着物を着せられるから

・ 病院のイメージが強い。何も反映せず、無表情で、吸い込まれそう。

・ 何もないが、何かを得られそうなたかみきれない感じがするから

・ 終わりであり、はじまりであるイメージから

・ 神聖なイメージ

3)「灰」

・ 生まれ変わるまでの過程の色。黒で死んで、灰色で生まれ変わる準備、白が産まれる色。

4)「紫」

・ 神聖なイメージ(うす紫)

・ 聖職の色

・ 真っ黒にならないくらいの広がりのある色だと思うので

・ 煙のように、物である私自身から別のものに昇化していくという考えから

・ お葬式のイメージが強いため

・ 死に際のひとはこんな色をしている

・ こんとん

・ 悲しく重いイメージ

・ 無っぽい色だから

・ テレビでやっていたから

C 死後の色の理由

1)「白」

・ 白紙に戻るから

・ これから色がつくから

・ 何色にも染まっていないイメージがあるから

・ クリアで何もない世界であると思うため

・ 無になる

-
- ・ 何もない
 - ・ 未知の世界
 - ・ 無敵
 - ・ 0になる
 - ・ 神聖な色
 - ・ 浄化される(ような気がする)
 - ・ 救われるイメージがある
 - ・ 生の縛りを受けない状態
 - ・ 神秘的な感じがするから
 - ・ 幸せな死後でありたいから
 - ・ 天使のイメージ
 - ・ まっさらに戻るイメージ
 - ・ 全てのものから心や精神が開放されている
 - ・ 一度リセットする
 - ・ 生活の中のしがらみが全てなくなる感じがする、何も背負っていない
 - ・ 人には作れない色だと思う。手の届かない所というイメージ。汚したらいけない神聖さがある。

2)「透明」

- ・ いろいろな色の光が混ざって白(透明)になった時、この世で背負った傷や罪がいろいろな愛情で浄化される気がするから

3)「黄」

- ・ 死後は落ち着いたものだと思うから(淡い黄色)
- ・ ほわほわ
- ・ 天国は黄色のような明るい色の感じがするから

4)「灰」

- ・ おほかの石

5)「黒」

- ・ 怖いイメージ、穴の中の暗闇のようなイメージ
- ・ 色を何も重ねられないような、まぜもののない純粋な黒
- ・ 黒の中に肉体を失った白い自分を想像できる

6)「紫」

- ・ 肉体から離れて、再生に向けて動くイメージ
- ・ 到達する場所のイメージ
- ・ 何かで紫は成仏と関係する色だと聞いたような気がしたから
- ・ 何となく
- ・ ドロドロして暗い感じがするから
- ・ もやもやしていて霧みtainなイメージ
- ・ 先が明るい暗い不明瞭だから

-
- ・ 夜のようなさびしいかんじ(濃い紫)
 - ・ (くらいむらさき)そんな空間を感じる→自然にはあまりない色?とどまった空気、重い
 - ・ 暗いから
 - ・ 紫斑、腐っていくイメージ

4. 色の理由の特徴性について

このように、色の理由についての記述の中には意味不明のものも見受けられるものの、一方で芸術系独特の感性が垣間見られるものもある。例えば、「オレンジ」色が、生の理由では「赤になりきれしていないから」や「迷っていて、赤く燃え切ってない感じだから」というようにマイナスイメージで綴られているのは興味深い。また、死の色が黒という理由に、現実としての葬式や喪服のイメージが優先されている回答が多かった。現実が大きな影響を持っていることが理解できるのだが、色の理由の記述に現実を優先させるような即物性(Sachlichkeit)は、ある意味で想像力の貧困を物語っているようにも感じられうるが、逆に、このような非日常的でスピリチュアルな問いかけに真摯に回答しているためだとも考えられる。美大の学生である以上、色の一般的象徴性を承知の上で「一般的」とは異なる圧力、バイアスに反応した上での彼らなりの正直な意見であろう。

5. 紫色を選ぶ理由についての特徴

前回の調査でも指摘しておいたように、今回もまた、生、死、死後の色のイメージの選択肢に、少数(2%前後、前回は約5%)ながらも必ず紫色を記述する回答者がいることは興味深い事実である。今回その理由についての記述を検討してみたところ、上に挙げたような理由が述べられていた。それらの理由のうち、それぞれの場合でプラスイメージの理由をまず並べ、後半部にマイナスイメージの理由を並べてみた。

例えば、生の色が紫である理由では、まず「最近恋をしているから」とか「宇宙に広がっていく波紋のイメージ」というプラスの理由につづいて、「情熱の赤で常に何かに対

し興奮しているようで、本当はどこか冷めた自分がいるから」とか「迷いがあって混んとしているように思ったので」や「悩みや不安が多いから」というようにマイナスの理由が挙がっている。

死の理由の紫には、「神聖なイメージ」や「聖職の色」という伝統的な理由が少なかった一方で、「死に際のひとはこんな色をしている」とか「こんとん」、「悲しく重いイメージ」などというようにマイナスのイメージを挙げる回答のほうが多かったのは予想外であった。それと同様に、死後の色の理由としての紫にも「紫斑、腐っていくイメージ」だとか「夜のようなさびしいかんじ」や「ドロドロして暗い感じがするから」、「先が明るい暗いか不明瞭だから」というように、やはり現実的・身体的な見方を含めたマイナスのイメージのほうが多く、「肉体から離れて、再生に向けて動くイメージ」や「到達する場所のイメージ」というプラス理由はまさにその2人だけの回答に過ぎない。

このように、紫色を回答する理由としては、確信的なプラスイメージの回答者のほうがごくわずかにすぎず、他の多くの理由はマイナスのイメージによるものであったことが判明した。いまの学生たちにとって、もはやかつての(宗教的)伝統は薄れており、実感されておらず、逆に紫を負のイメージで捉える見方、感じ方が多数を占めているのである。このことから、逆に、紫という色の持つ特性がいかに文化的・歴史的な制約を受けたものであるかがわかる。貴族の衣や高僧の袈裟などはもはや若者たちにはリアルには感じられない時代なのである。芸術的、あるいは身体的な感性からすれば、紫には不安感や死の影が刻印されているのである。

6. 4トーン分析からの考察

先述したように、色調＝トーンという観点から、結果をさらにわかりやすく可視化しようとする場合、ダイアグラム化も有効な手段の1つである。つまり、「あかるい-くらい」/「はで-じみ」をそれぞれ縦軸と横軸に配置し、[図表3]に示した4グループの色分類を基にそれぞれの結果を配分・入力していくという方法である。4つの傾向を持つ色調による分類で、「4トーン分析」と称される。生、死、死後のそれぞれの色彩イメージの印象効果を、[図表4-4]、[図表5-4]、

[図表6-4]によって示した。

まず、生の色[図表4-4]では、横軸の「はで」なトーンヘグラフが引き伸ばされている傾向が分かる。トーン分析における高彩度色への集中は、その類似である明度を合計したばあい、その占有度は高まる。図示のように、生の色は、「はで」で、目を引く、活動性を感じさせる「あかるい」色が多く挙げられたということであろう。ダイアグラムの形は「はで」で「あかるい」方向に傾いた菱形を示すこととなった。

次に、死の色[図表5-4]は、縦軸の「あかるい」方向と「くらい」方向という反対の2方向両方に集中的に分布している様子が認められる。その際、「くらい」ほうが多い傾向を示しているので下方向に若干長く引き伸ばされた菱形となっている。西欧的な考え方では、黒に代表される暗い色のほうが死を表しやすく、ここでも、先の自由記述にも見られたように「光のない世界のイメージ」、「闇、無などを連想するから」という理由が認められた。しかし、逆に、白のようにすべての光を反射するような状況で何も見えないような状態を死の色とする意見、つまり先の自由記述で言えば、「まぶしい光のイメージ」、「何も反映せず、無表情で、吸い込まれそう」、「何もないが、何かを得られそうなつかみきれない感じがするから」、「終わりであり、はじまりであるイメージから」白だという、生をリセットするとも言えるようなプラスイメージも少なからず認められるのは特徴的であろう。両極の感じ取り方に分解されている傾向がある。

これに対し、死後の色[図表6-4]も死の色と同様に「あかるい」と「くらい」の両極に集中はしているが、「あかるい」ほうが2倍以上の数値を示している点は死の色の分布とは異なる。つまり、死後の色のダイアグラムの形は、死の色の形と相似形であるが、後者を逆さにひっくり返したような、「あかるい」上方向に伸びた菱形になっている。色としては先述のとおり白系統が特に多く、結果的には日本、あるいは近隣国である韓国や中国で喪の色として今に続く伝統的習俗の色と共通性を示すものとなっている。学生の中にそのような伝統について十分よく理解している人が多いとは考えられないが、文化に潜む色の捉え方はある意味自然に身について、引き継がれていく部分もあるように思われる。ただし、「死者は白い着物を着せられるから」とか「病院のイメージが強い」、「めまいがしたり気を失うときは目の前が真っ白になるので」などという理由にはやはり、現実的で身体的な要素にも大きく影響されていることも認められる。

7. 世界の色彩語彙体系との関連

以上のように、トーンの分布をみると、生と死、死後の色の連想の大まかな傾向には、古代からの色彩の名前の概念に近いものがあるのではないと思われる。1969年にアメリカの文化人類学者ブレント・バーリン Brent Berlinと言語学者ポール・ケイ Paul Kayは98の言語の色彩言語について7段階の発展過程のどこかに当てはまると発表している⁴。基本色彩語 (basic color terms) と言って、概念的に把握する色の名前があり、それぞれの文化の中で最初に学習するレベルの名前のことであるが、それらが、どの程度に分化しているかという研究である。文化が成熟しているほど、語彙の数は多くなる傾向があると指摘されている。それによれば、世界の色彩語彙の体系は、文化によって基本色彩語彙の数は2種から11種まで存在し、文化が成熟しているほど、語彙の数は多くなる傾向があるという、普遍的な特質を指摘している (例えば、日本では虹は7色だが、2色とみる文化もある)。そして、文化の発達段階に応じて、色彩語彙が多くなる7段階を仮説提唱した。色彩語彙の増えかたは、3色だと3つ目の色は必ず「赤」、4色あれば4つ目の色は必ず「緑」か「黄」、5色あればその両色が入る、というように色彩語彙の出現順序の規則性を提唱した。彼らの研究によると、色彩語彙の7段階とは次のようなものである。

- 第1ステージ 白 (white) と黒 (black) は全ての言語にある
- 第2ステージ 色名が3つなら赤 (red) が出現する
- 第3ステージ 色名が4つなら緑 (green) または黄 (yellow) が出現する
- 第4ステージ 色名が5つなら緑と黄が出現する
- 第5ステージ 色名が6つなら青 (blue) が出現する
- 第6ステージ 色名が7つなら茶色 (brown) が出現する
- 第7ステージ 色名が8つ以上なら、紫 (purple)、桃 (pink)、橙 (orange)、灰 (gray) か、それらのうちどれかを組み合わせた色が出現する

これを表示化したものが[図表7]である。

ステージ	1	2	3	4	5	6	7
色数	2色	3色	4色	5色	6色	7色	8色以上
色彩語彙	白	白	白 (イエロー)	白 イエロー	白 イエロー	白 イエロー	白 イエロー
		白					イエロー オレンジ
		レド	レド	レド	レド	レド	ピンク レド
					グリーン	グリーン	グリーン
			(グリーン)	グリーン		ブルー	ブルー
		ブラック	ブラック				ブラック
				ブラック	ブラック	ブラック	ブラック
						ブラウン	ブラウン
						ブラック	グレー
							ブラック

【図表7】色彩語彙発展の7段階 (Berlin & Kayに基づく)
(カラー版はP.7参照)

このように、最も多くの言語において共通するのは白 (white) と黒 (black) を表す色名である。さらに赤 (red)・青 (blue)・黄 (yellow)・緑 (green) という概念も多くの言語に共通して存在している。これらの最も基本的な色名は、原料やイメージの元となるものの名前ではなく色そのものを表す言葉として存在している。ただし、古典的な日本語など一部の言語では青が緑を含んでいるような場合もある。日本で古代から存在する色名は、上記の「アカ (明)」、(赤)「クロ (暗)」、(黒)「アヲ (漠)」、(青)「シロ (顕)」、(白)」の4色であり、これらは光の明暗の状態に由来する。他の色は、鉱物・植物名などからの借用が多い (簡単な区別法としては、「○○色」を「○○の色」というように分割できないものが古い、とすることができる。)。古代からある色が上記4色であるという立証の一つと考えられているのは、現代日本語においてその使い方として、この4色には形容詞があり、「アカい」「アヲい」「シロい」「クロい」という。黄は「黄色い」、茶は「茶色い」というように「色」が含まれる。その他の色名には形容詞がない。また、「アカアカと」、「シラジラと」、「クログロと」、「アオアオと」のように副詞的用法を持つ色もこの4色のみで古代日本語では、明るい色はアカ、暗い色はクロ、はっきりせず曖昧な色は「アヲ」「漠」、はっきりした色は「顕し」(しろし)「著し」(しるし)といい「シロ」と呼ばれていたらしい。この古代語の観点を今回の調査結果と照らし合わせて生、死、死後の色を見直してみると、世界は基本的には白と黒で構成されていて、そこに人間が赤としてやってきたと捉えられそうである。生は赤を代表する明るい色に通じる。黒は、暗くなって存在がなくなった状態である。白は光がある状態を示し、最も原初的な「いろ」の概念として多くの民族に観念されたであろう。白

は人間がそこからやってきてやがて去っていくところというような生前や死後の他界観念に通じる色と言えるのではなかろうか。日本でも古来、白は「喪」の色であり、現在でも死者は白装束で旅立っていく。

8. 芸術的感性とは何か―結びにかえて―

今回のスピリチュアルな色イメージの調査結果について要約的にまとめてみよう。

まず、生の色イメージについては、赤、青、黄、白を中心とした、「あかるい」よりもむしろ「はで」な色彩感覚が極めて目立った結果となった。奇しくもこのような結果は、古代インド、仏教思想（特に密教）でいう五色つまり五大色（地、水、火、風、空）（五正色）や古代中国の『老子』『書経』『礼記』などの五行説に基づく色と対応している。五色とは、青(nila)、黄(pita)、赤(lohita)、白(avadata)、黒(krsna)である。生の世界は、基本的にアジアの古代的な宗教的世界観による伝統色の配色に、恐らく無意識的に結びついているものと推察されうる⁵。

死のイメージ色と死後のイメージ色とは、白と黒の二元的な世界観を中心に配当され、互いによく似た4トーンダイアグラム形を示していた。ただ、死後のほうが、より白に比重が置かれ、その他の有彩色回答を併せて考えると、死よりも「あかるい」（「はで」ではなく）傾向として観念されていると言えよう。

このように、生、死、死後とも、かなり明確に意識されイメージされている世界観があり、それらは学生のみならず多くの人々に共有されていると言えるのではないだろうか。日本で黒が喪服になったのは明治期以降であるが、闇の世界、暗黒で果てしない深みを持った無限の世界という死の捉え方は、恐らくは科学的思考や唯物論的世界観が定着するようになる近・現代日本の特徴と考えられる。資本主義経済が蔓延し、通時的・共時的な両差異化によるアイデンティティーの抱き方によっても収拾しきれない一種の不気味なブラックホールのごとき“死”の位置が見透かされてくるようだ。言い換えれば、現代においては“死”の意味付けはもはや不可能となり、われわれの一人ひとりが個別的・個人的に意識し、考え、意義付けをしていかねばならない厄介なハードルなのであろう。そういうものとして死が共有さ

れていると言ってもよからう。

一方、今回の結果を、色彩語彙という文化人類学・認識人類学の視点から見ても、その発展段階の初期型である白=死後の世界、黒=死の世界、赤=生たる人間の世界という構成が基盤にあるように推察される。そこには、アジアというよりも、より普遍的に、人間の原初的な色彩語彙感覚が見て取れるのは大変興味深いことである。

芸術的な色彩感覚の原点も極めて人間的な次元に存在すると言えるのではなかろうか。ただ、今回の結果が示すのは、マクロな視点からは学生の感性も人間の原初的な傾向に合致しているが、詳細を検討するとそうではないとする回答の幅も広く看取されることである。回答される色の種類も実に豊富であり（自由記述の色の名前の答え方）、分類に手こずる場面がしばしばあった。このような文字通りの多彩性とその理由内容のユニークさは、芸術志向における個人的な“こだわり”を実感させてくれたのも事実である。

芸術的な色彩感覚というものがあるとすれば、それは一部の回答が示していたように、

① 現実的感性=身体的感性

と強く結びついた即物的（^{ザッハリッヒ}sachlich）な点がまず特徴として挙げられるだろう。しかし、感性には予想以上に複雑な地層も潜んでいることをわれわれはこれまでの調査から明確に感じ取ることができた。例えば、

② 感覚的感性=全く個人的な感覚嗜好に基づく感性

③ 知的感性=歴史や文化を深く知り学ぶ上につく感性

④ 霊的感性=深層心理的かつ地球的・宇宙的広がりを持つスピリチュアルな感性

といった諸感性はそれぞれ地層を異にするように推測される。これら4つの感性の地層をより丹念に掘り起こし、それらの特徴や関係性をさらに詳細に分析していく必要性を感じている。あるいは、それらの感性は地層のような分離的堆積状況ではなく、脳の知性的のように、並列される各モジュールを形成しているのかもしれない。ともあれ、少なくともそれら4種の感性の総合的な相互作用が芸術的感性なるものを構成し、全体的な芸術創造力として機能しているのではないかと考えられる。

（本稿は平成24年度本学学長予算研究助成および斎藤報恩会学術研究助成による研究成果の一部である。）

註

1. 久保田力・渡部論「芸術系大学生のスピリチュアリティに関する意識について―質問紙調査から―」、『論集（印度学宗教学会）』37号、2010、pp. (1)～(23)（横組）。
2. 久保田力（研究代表者）・古藤浩・三瀬夏之介・渡部論「芸術とスピリチュアリティ―東北芸術工科大学学生対象の質問紙調査結果とその分析―」、『東北芸術工科大学紀要』18・19合併号、pp. 98～161。この論文は電子版で閲覧できる。[ゆうキャンパスリポジトリ]<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/3893>。また、その要旨は、久保田力「芸術とスピリチュアリティ」、『宗教研究』371号、2012.3、pp. 374～375。
3. 久保田力「生・死・死後の色のイメージ―美大生への質問紙調査から―」、『論集（印度学宗教学会）』38号、2011、pp. (71)～(95)。（横組）
4. Brent Berlin and Paul Kay, Basic Color Terms, their Universality and Evolution, 1969, 1999 repr. CSLI Publications, U.S., pp. 104～110。なお、本稿[図表7]は、バーリンらの研究を踏まえて横究氏が作成した図（『カラーデザインのための色彩学』オーム社、2006、p. 106）をもとに杉山先生が作成されたものである。ただ、バーリンらの研究は今や古いものであり、方法論自体に批判的な声も多いことは注意すべきである。本稿では、これをあくまで1つの参考分析資料と捉えておきたい。ちなみに、チベット語の専門家である長野泰彦氏の論文「色彩分類」、一合田濤編『認識人類学』（現代の文化人類学①、至文堂、1982）所収、pp. 107～136（特に、pp. 118～127）一の批判等。色彩については、塚田敢『色彩の美学』紀伊国屋書店、1978、大井義雄『カラーコーディネータ入門 色彩』（改訂増補第2版）日本色研事業、2007、江幡潤『色名の由来』東京書籍、1980など参照。すべての色彩を「青し」「赤し」「白し」「黒し」の4つに分節する古代日本人の基本的色彩感覚から見れば、七色の虹は結局、赤と青の二色に集約されるという報告もある。佐竹昭広『古語雑談』岩波新書、1986、pp. 40～49。なお、ヨーロッパ先史時代の洞窟壁画の彩色は、基本的に、赤（赤茶）・黒・黄の3色である。これに対し、日本の縄文時代の色は、赤・黒・白である。
5. 仏教でいう五大色（ごだいじき）の基本色は、インドでは僧侶の法衣・袈裟には使用してはならない華美な色とされている。例えば、千手観音の右手の持物の1つである五色雲や、極楽浄土の莊嚴な色などである。仏教の五大には、地＝黄、水＝白、火＝赤、風＝黒、空＝青が、また、陰陽説の五行には、木＝青、火＝赤、土＝黄、金＝白、水＝黒がそれぞれ配色されるのが一般的である。密教では五智、五仏、五字などの教義や方角にも配される。これに対し、緋・紅・紫・緑・硫黄の5つの中間色を五間色（ごけんじき）という。ヒンドゥー教カースト制度のもとでは、バラモン（祭司）は白、クシャトリア（王族）は赤、ヴァイシャ（庶民）は黄色、シュードラ（隷民）は黒というイメージが当てはめられていた。ただ、筆者が経験

した限りでの現代インドでは、女性たちが身にまとうサリーは実に色とりどりの鮮やかな原色系を多用しており、乾いたインドの風景によく映える。老女でも鮮やかなサリーを着ているので近くに寄るまではスタイルのよい若い女性と変わらないので驚くことが多い。結婚式・葬式等のハレ着以外に女性のサリーの色に関する決まりごとやタブーは一見存在しないように見受けられる。

[執筆著]

久保田 力

Chikara KUBOTA

教養教育センター

Center for Liberal Arts

教授

Professor